沖縄県における象設計集団の作品に見る地域計画の概念の表出

正会員　○服部敦*
同　宮道喜一**
同　小阪亘**

象設計集団　沖縄県　地域計画
計画遺産　保存活用

1　はじめに

象設計集団の初期の作品は、沖縄県で多く設計・建設されている。沖縄本土復帰後の 1970 年代に、象設計集団は、沖縄県北中部の自治体で多数の地域計画の策定に関わっており、初期の作品には地域計画の策定過程で形成された概念の表出が認められる。竣工後 40 年から 50 年を経過しつつある初期の作品には、すでに取り壊されたものがあり、現存する施設についても保存の是非が議論される時期に来ている。これらを個々の作品として見るだけでなく、沖縄本土復帰直後に策定された一連の地域計画の概念が表出した計画遺産群として捉え、歴史的・社会的な価値を再評価することにより、一群としての保存・活用の途を拓くことを目指す。

2　象設計集団による沖縄県内の初期の作品と地域計画

1971 年に設立された象設計集団は、沖縄こどもの国のマスタープラン策定業務を皮切りに最初の 10 年間の仕事の多くを沖縄県内で積み重ねているが、その間の作品は「公共建築が三つ、公園が二つと、長い年月の割に少ない」[注1]と主要メンバーの一人である大竹康市が述懐している。これらに記念碑 1 つを加えた 6 作品が完成した作品である。一方、恩納村で 1 つ、名護市で 4 つ、今帰仁村で 4 つ、石川市で 2 つ、沖縄市で 2 つの計 13 の地域計画の策定に携わり、この他にも多数の地区・施設の構想・計画を行なっている（表 1 参照）。

象設計集団が関与した地域計画は、名護市総合計画の逆格差論が特に知られているが、地域主義、内発的発展論、コモンズ論、住民参加手法、文化的景観など、地域づくりに関わるのちの重要な概念・手法を先取りした先駆的な計画群と見ることができる。

表 1　沖縄県内の象設計集団の業績一覧（筆者作成）

自治体名	作品（竣工年）	地域計画（策定年）
沖縄市	沖縄こどもの国・沖縄こども博物館(1972)	沖縄市地域社会計画、商業近代化地域計画(1977)
竹富町	波照間の碑(1972)	（実績なし）
恩納村	（実績なし）	基本構想(1972)
名護市	21世紀の森公園(1981) 名護市庁舎(1981)	総合計画基本構想(1973)、第１次産業振興計画、東海岸地区・内海地区・市街地の計画(1974)
今帰仁村	今帰仁村中央公民館(1975)	総合計画基本構想、土地利用基本計画(1974)、第１次産業振興基本計画(1975)、くらしの基本計画(1976)
石川市	白浜原公園(1980)	石川市総合計画基本構想、土地利用計画(1976)

図 1 現存する沖縄本島の象設計集団の作品群（筆者撮影）

3　沖縄県内の初期作品に見る地域計画の概念の表出

象設計集団は、地域計画の策定過程において、自ら象語録と呼ぶ独自の概念を形成した。これらの概念がどのように作品群に表出しているかについて考察する。

1）発見的手法

象設計集団は、地域を徹底的に歩いて探索し潜在的資源を発見し計画に活かしていく手法を「発見的手法」と呼んだ。発見的手法の考え方は、沖縄以前に大竹らが参加した伊豆大島・元町計画(1967-1969)の策定過程を通じて形成されたもので、地域計画を策定する際の基本姿勢となった。

発見的手法により、沖縄の風景を形づくる資源として、グスクなどの歴史的建造物から米軍統治時代に普及したコンクリートブロック建築まで一貫する連続的な石造文化を見出している。この発見は、名護市総合計画では「新しい城（グスク）づくりへ！！」[注2]という呼びかけにつながり、グスクのような琉球石灰岩の石積みの造形は、波照間の碑にはじまり、白浜原公園や 21 世紀の森公園に表れる。一方で、コンクリートブロック造の造形は、沖縄こども博物館の二重の外壁にはじまり、今帰仁村中央公民館から名護市庁舎へと発展するブロック造の柱に表れる。名護市庁舎では、手摺やルーバーに花ブロックが採用され、外観はほぼブロックで覆われる。

２）自力建設

伊豆大島・元町計画ではもう一つ、「自力建設」という概念が生まれている。自力建設では、単なる住民参加ではなく、「人々の心をゆさぶりながら新しい共同体のシンボルをつくる」[注3]ことが目指される。

この概念は、恩納村から今帰仁村に至る一連の地域計画では、計画の三原則の一つに「住民自治」を掲げることで表れる。字ごとに住民が自力で建設した公民館と共同売店が集落の核となっていることを発見したことが住民自治を掲げる基礎となっている。

自力建設は、地域の青年団による波照間の碑の建設に始まり、今帰仁村中央公民館における貝殻を用いた住民による装飾作業への参加、21 世紀の森公園における住民による防風林の植樹活動などとして表れる。

３）山原型土地利用

発見的手法により見出されたものに、「山原型土地利用」という集落の土地利用モデルがある。山から海にいたる川の流れに沿って短冊状に集落の生活・生業の場が形成され、その中核に、クサテと呼ばれる森に抱かれた神が宿るアサギ広場があり、その周りに公民館と共同売店が配置され、居住エリアが形成されるという伝統的な土地利用モデルが見出され、各地の総合計画の基礎的な計画単位として位置付けられた。

今帰仁村中央公民館は、字公民館と対立するものではなく、共生しつつ都市全体レベルの役割を引き受けるものとして計画され、アサギ広場と一体となる開放的な字公民館の平面プランの詳細な検討の上に、広場と一体となった開放的な平面計画を持つ。名護市庁舎には、街側に多数のアサギテラスが市民と職員が共用する中間的な空間として配置されている。

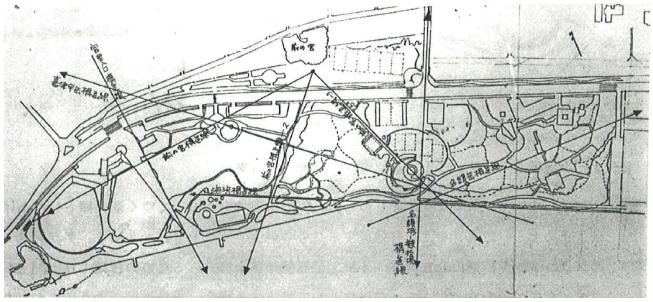
字の役割を重視する姿勢は、今帰仁村中央公民館では自力建設による貝殻の装飾により通路に全ての字名が記されたこと、名護市庁舎では字の数と同じ 56 体のシーサーが海側の壁面に置かれたことに表れる。

４）自然の源と触手あるいは環境構造線

象設計集団の一連の地域計画では、自然との共生が計画の重要な原則として位置付けられる。その一環として、周囲の自然との関係の中で地域の空間構造を捉えようとする取り組みが生まれる。その姿勢が、名護市総合計画では「自然の源と緑の触手」「山の環と海の環」として、沖縄市の地域計画では「緑の大三角形」として、大竹が参加した仙台の将来構想では「緑の手」として表れる。

自然との関係で地域の空間構造を捉え、自然を都市や集落の計画に引き込もうとする考え方は、建築・公園の設計に援用され、21 世紀の森公園の設計の際に、周囲の既存の都市や自然の構造を建築・公園の中に引き込むための「環境構造線」という概念が生まれている。環境構造線のガイドにより、都市や自然と呼応する構造物の軸線やゾーニングが決定されるようになる。「環境構造線」の概念は名護市庁舎の設計にも適用され、のちの象設計集団でも重要な設計概念として受け継がれている。

図 2 21 世紀の森公園の環境構造線（出典：参考文献(4)）



４　まとめ―計画遺産の保存活用に向けて―

大竹は「建築はマチであり、マチは建築である」[注4]という。建築はマチに対して開放され、マチが建築に入り込み、一体化するということであり、今帰仁村中央公民館の緑の屋根や名護市庁舎のアサギ広場として実現する「外皮」という概念がそのために導入される。また、大竹は最終的な目標は地域の「幻の風景」を共有することだともいう。それは「地域の総合的な空間像をとらえ、そのイメージを建築に凝縮して」[注5]いくことであり、地域計画の取り組みが建築・公園の設計に凝縮されていったことがわかる。

このように、象設計集団の沖縄県における初期の作品は、地域計画の策定過程において形成された概念が表出し、地域の空間構造が凝集された一体の作品群として捉えることができる。即ち沖縄本土復帰後の象設計集団による地域計画の計画遺産群として再評価が可能となる。

もっとも最初の作品からすでに 50 年、最後の作品から 40 年を経過しつつある中、すでに沖縄こども博物館は取り壊され、今帰仁村中央公民館の緑の屋根は剥き出しのコンクリートに変わり、名護市庁舎のシーサーは取り外されて博物館で眠り、構造物には劣化・損傷が目立ちつつある。名護市庁舎の移転が取り沙汰されるなど、保存の是非が問われる時期は近い。いま改めて、計画遺産群としての歴史的・社会的な価値を認識・再評価し、保存・再生・活用の途を拓いていくべきである。

<注>注 1 参考文献(1)p34 参照。注 2 参考文献(2)p10 参照。注 3 参考文献(1)p210 参照。注 4 参考文献(1)p276 参照。注 5 参考文献(1)p305 参照。

<参考文献>(1) 大竹康市：これが建築なのだ　大竹康市番外地講座, TOTO 出版, 1995. 9／(2) 沖縄総合開発研究会：恩納村基本構想,1972,10／(3) 名護市：名護市総合計画基本構想及び各種基本計画,1973～1974／(4) 名護市：名護市総合公園基本設計報告書,1978.3／(5) 今帰仁村：今帰仁村総合開発計画基本構想及び各種基本計画,1974～1976／(6)早稲田大学吉阪研究室：杜の都・仙台のすがた,1972

*中部大学工学部都市建設工学科　教授・工博
**まちなか研究所わくわく

* Prof., Dept. of Civil Engineering, Chubu University, Dr.Eng.
** Machinaka Institute WAKUWAKU